台大日本語文研究第 38 期
2019 年 12 月，頁 75-103
2019-09-30 收稿，2019-11-25 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201912_(38).0004

有關漱石作品中的日語外來語表記之考察
—以〈ランプ〉為例—

林慧君*

摘要

本篇論文特別以漱石小說中的〈ランプ〉外來語一詞為考察分析對象，主要是探討漱石文學作品中的外來語表記問題。首先調查當時各種辭典登錄〈ランプ〉一詞的狀況，考察〈ランプ〉在當時的受容以及與翻譯詞之間的關係。並採用『漱石新聞小説復刻全集』(ゆまに書房)以及『定本　漱石全集』(岩波書店)兩種版本，調查漱石小說中的〈ランプ〉表記，分析漱石對於外來語(〈ランプ〉)的受容態度、表記意識，以及表記與漱石表現意圖之間的關聯性。

考察結果得知：兩種版本其表記最多的種類並不相同，特別是『漱石新聞小説復刻全集』，到了漱石後期的小說，發現其〈ランプ〉的表記原則呈現使用附帶片假名標音的漢字表記「洋燈（ランプ）」單一化的傾向。另，透過調查，確認了漱石對於〈ランプ〉此一外來語同時具有語意與發音的表記意識。此外，也論述了漱石因作品內容的特殊性以及內容文脈的表現意圖不同，所使用的〈ランプ〉一詞的表記意識亦有所差異。

關鍵詞：外来語、夏目漱石、表記意識、文脈、標音

* 台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Investigation into Japanese GAIRAIGO Notation in SOSEKI's Literary Works : "RAMPU" as an Example

Lin,Hui-jun*

Abstract

The thesis mainly discusses the GAIRAIGO notation of〈RAMPU〉in SOSEKI's novels. Investigating the way dictionaries recorded the term〈RAMPU〉at that time and its relationship between sense translation and adoption , we selected "The Reprinted Collection of SOSEKI's News Novels" (YUMANI SHOBO) and "The Collection of SOSEKI's Works, Definitive Version"(IWANAMI SHOTEN) in order to study the notation of〈RAMPU〉in SOSEKI's novels, analyze SOSEKI's consciousness of notation and adoption of the GAIRAIGO〈RAMPU〉, and SOSEKI's expressing purpose.

According to the research, the types of notation that is mostly adopted are different in the two textbooks. Especially in the "The Reprinted Collection of SOSEKI's News Novels" , there is a convergence to purely using 「洋燈(ランプ)」, which is KANJI notation with KATAGANA phonetic notation , in SOSEKI's late novels. Besides, it was confirmed that SOSEKI had consciousness of semantic as well as phonetic notation of the GAIRAIGO〈RAMPU〉. Moreover, it is clarified that SOSEKI's consciousness of notation varies depending on the particularity of work's contents and expressing purposes of the contexts.

Key words: loanword, SOSEKI NATUME, conscious of notation, context, phonetic notation

* Professor of Department of Language and Literature of Japanese, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

漱石作品の外来語表記に関する一考察
—〈ランプ〉を中心に—

林慧君*

要旨

本稿は、特に漱石の小説における〈ランプ〉という外来語を取り上げ、漱石の作品における外来語の表記問題について考えてみるものである。まず、当時の辞書における「ランプ」の登録状況を調べ、当時の〈ランプ〉の受容とその翻訳語との関係を考察する。次に、『漱石新聞小説復刻全集』(ゆまに書房)及び『定本　漱石全集』(岩波書店)の両テキストを用いて漱石の小説における〈ランプ〉の表記を調査し、漱石の外来語(〈ランプ〉)に対する受容態度や表記意識、またそれと漱石の表現意図との関わりなどを分析する。

考察した結果、両テキストにおける〈ランプ〉の表記種類は一番多いタイプが相違すると明らかになった。特に、『漱石新聞小説復刻全集』の場合では、漱石の後期小説になると、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」一本化への収束現象というような表記原則の傾向が窺われた。なお、漱石が外来語〈ランプ〉に対して意味と音の両方をともに意識するという表記態度を持っていたことを確認できた。また、作品内容の特殊性や文脈による表現意図の違いによって漱石の〈ランプ〉に対する表記意識が異なることも明らかにした。

キーワード：外来語、夏目漱石、表記意識、文脈、ルビ

* 台湾大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

漱石作品の外来語表記に関する一考察
—〈ランプ〉を中心に—

林慧君

一、はじめに

“文明開化”の時代だった明治期、日本が西洋から新しい技術や文化などを導入する際、知識人たちが重要な役割を果たしたことは言うまでもない。ところが、彼らの外来語に対する受容意識などの理解は、当時の外来語の使用(表記の仕方など)からアプローチできると思われる。本稿では、明治期の文学作品における外来語の表記問題について分析するが、中で代表的な文豪の一人である夏目漱石の作品を取り上げ、その外来語の表記を考察することにする。

夏目漱石は周知の如く元英語教師であり、イギリスへの留学経験もあることから、西洋の文物などを普通の人よりも敏感にとらえていたと思われる。そのためか、漱石の作品には様々な外来語が用いられ、その外来語の表記もバラエティーに富み、様々である。例えば、カタカナ表記のみの「インスピレーション」や、カタカナルビ付きの漢字表記「会堂(チャーチ)」またはひらがなルビ付きの漢字表記「煙草(たばこ)」、また音訳漢字表記だけの「瓦斯」、更には「迷へる子(ストレイ、シープ)」のようなカタカナルビ付きの漢字かな交じり表記などなども見られる[1]。また、諸々な表記法を有する外来語もあり、例えば「石鹸(しゃぼん)/石鹸」「電鈴(ベル)/呼鈴(ベル)/ベル」「燐寸(マッチ)/燐寸(まつち)/マツチ」などがその例である。

本稿では、漱石作品における種々な表記をもつ外来語のうち、〈ランプ〉という語を分析の対象として取り上げる。その理由は、使用頻度がやや高く、多くの作品に出ているだけではなく、その表記法も各々だからである。方法としては、通時的な観点をもって、漱石の作品における外来語〈ランプ〉の表記を考察することを通して、

[1] 漱石作品における外来語表記の種類に関しては、林(2018)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

漱石の外来語に対する受容態度や表記意識などの一面を解明しようと思う。

二、考察テキスト及び考察法

第一節で述べた通り、本稿の考察対象は、漱石作品における、ゆれがあって複数表記のある外来語〈ランプ〉であるが、まずその表記を整理しておく。

本稿では漱石の表記意識を反映していると言われる、『漱石新聞小説復刻全集』(ゆまに書房)及び『定本　漱石全集』(岩波書店)を考察のテキストに選定することにした。前者の『漱石新聞小説復刻全集』は、朝日新聞に掲載された漱石の作品を直接に撮影したものであり、『虞美人草』から『明暗』までの長編小説のすべてといわゆる小品類が収録されており、全部で 11 巻ある。復刻全集の監修者である山下浩によると、同復刻全集は、当時の「東京版朝日新聞の読者に提供された本文」であり、また初版本類の本文の大部分は新聞からのリプリントであると言う[2]。従って、漱石本人の表記意識が反映されていると言えよう。が、同復刻全集には『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『草枕』『野分』の作品が欠けているという欠点がある。

一方、後者の、岩波書店によって出版された『定本　漱石全集』は、岩波書店が 1993 年から刊行を始めた『漱石全集』の第二次刊行後に発見された新資料を加えて注解を増補し､刊行したものである。この岩波書店の『漱石全集』は、自筆原稿を底本にするという方針が掲げられている。ところが、漱石原稿を底本にした形での出版だと言いながら、漢字は旧字体は残されず、新字体が用いられた、といった欠陥があると指摘されている[3]。漢字問題をさておき、岩波書店のこの全集は漱石作品の収録が完備され、仮名遣いなども原稿の

[2] 「監修のことばーなぜ今『漱石新聞小説復刻全集』なのか」(山下浩) http://www.yumani.co.jp/np/isbn/4897147409 (2019.7.17)
[3] 山下(1994)16 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

とおりであるし、振り仮名も原稿のままと言われている。つまり、原稿等の自筆資料の底本をできるだけ忠実に翻刻したとのことである[4]。

本稿では、まず、明治後期～昭和初期の諸辞書(国語辞書、外来語辞書、和英辞書)における〈ランプ〉の登録状況を調べ、表記にゆれのある〈ランプ〉の、当時における受容状況や翻訳語との関係などを確認する。そして、上記した二種類のテキストに基づき、漱石の小説における〈ランプ〉の表記を調査する。両テキストの表記の異同も確認しながら、漱石の外来語〈ランプ〉に対する受容態度や表記意識、またそれと漱石の表現意図との関わりなどを論じる。

三、調査分析

（一）〈ランプ〉の日本伝来の歴史、及び明治後期～昭和初期の辞書登録状況

調査分析に入る前に、まず、簡単に〈ランプ〉の日本への伝来の歴史に触れておこう。

『日本大百科全書』（ニッポニカ）[5]によると、〈ランプ〉は石油ランプと通称される、洋灯の一種で石油用の灯火具であるが、日本最初のものは 1859 年(安政 6 年)越後(新潟県)長岡の鈴木鉄藏が横浜でオランダ商人スネルから購入したものだそうである。早くも 1872 年(明治 5 年)に大阪商人たちにより日本製のものが作られたが、普及しだしたのは明治二十年頃からであり、明治期後半になると石油ランプの全盛期を迎えたと言う。[6]

上述した〈ランプ〉の日本への伝来の歴史からすると、漱石の最初の長編小説『吾輩は猫である』(明治 38 年)から最後の『明暗』(大

[4] 岩波書店の『漱石全集』の編集方針などは『定本　漱石全集』第一巻の後記「今次『漱石全集』の本文」について」を参照。
[5] JapanKnowledge Lib による。
[6] 〈ランプ〉の日本への伝来の歴史に関しては『日本大百科全書』（ニッポニカ）及び『夏目漱石事典』を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

正 5 年)までの間は、ちょうど〈ランプ〉が広く普及されていた時期に当たる。そのためか、漱石の小説にもよく登場しているのである。

ところで、明治期に出版された国語辞書、英和辞書、外来語辞書の三種類の辞書をもって〈ランプ〉という語が如何に受容され、どのように訳され、登録されていたのかを確かめよう。

まず、最初の『和英語林集成』(1872 年)の場合、和英の部には登録されていないが、英和の部では、

「Lamp,n.Andon,todai,shoku」

と載っている。つまり、「lamp」という外国語が既に明治初期の日本の代表的な辞書に収録されており、早くも日本に伝わってきた外国のものだとわかる。ところが、辞書の説明を見ると、明治初期はまだ「洋燈」という訳語は与えられていなかったようである。

そして、『和譯字彙』(1888)と『再訂増補　和譯英字彙第六版』(1891)でも、

「Lamp,n.　燈；火燈；燈火」　(『和譯字彙』)

「Lamp,n.　燈；燈火」　(『再訂増補　和譯英字彙第六版』)

の如く、やはりまだ「洋燈」という訳語は見当たらなかった。

ところが、日本の近代的国語辞典の始まりとされている『日本辞書 言海』(1889-1891)になると、

「ランプ(名)洋燈［英語、Lamp］硝子製ノ、火をトボス器、石炭油ヲ用キル。」

のように、「洋燈」という訳語が初めて辞書に見られるのである。そして、翌年出版された『雙解英和大辭典』(1892)、また『雙解英和大辭典 增訂第二十五版』(1907)にも「洋燈」という訳語の解釈が現れてくる。

その後、1900 年代以降出版された国語辞典にも「洋燈」という訳語の注釈が、表一のとおりに見られるのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

表一　1900 年代以降出版の国語辞典における〈ランプ〉の注釈

ことばの泉(1904)	辭林(1907)	大日本国語辞典(1919)
らんぷ 名 洋燈。『英語』一ともしびをともす器。硝子、または、金屬製にて、石油を用ゐる。二はげあたま。禿頭。俗語。	ランプ〔洋燈＝Lamp〕(名)火をともす普器通燃料として石油を用ふ、石油を入るゝ器に口金を附し、これに心(シン)を挿入し、火を點じて「ホヤ」と稱する玻璃製の圓筒をさす。	らんぷ (英Lamp) (名)燈火器の一種。石油を容れたる器に金属製の口金を附し、綿布製の燈心を挿入して火を點じ、硝子製のほやにて覆ふもの。洋燈

なお、1900 年代以降出版された外来語辞典として、『日用　舶来語便覧』(1912)と『外来語辭典』(1914)、そして『日本外来語辞典』(1915)の三冊を用いて〈ランプ〉を調べてみたが、いずれも「洋燈」という訳語の注釈が記されていることを確認した。

表二　1900 年代以降出版の外来語辞典における〈ランプ〉の注釈

日用　舶来語便覧(1912)	外来語辭典(1914)	日本外来語辞典(1915)
ランプ…洋燈 Lamp(英)石油を入れて火をともす器。	ランプ(Lamp) (英) 洋燈。	Rampu(洋燈), n. 普通玻璃製又ハ金属製ニシテ, 拇ヲツケタルモノ, 臺ヲツケタルモノ, 又天井ヨリ吊スベキモノアリ. Eng. lamp.

要するに、漱石が小説を書いていた時期、〈ランプ〉は日本社会にかなり受け入れられ、普及された照明器具であり、明治後期～昭和初期ごろの辞書に「洋燈」という意訳語が載っている状況からしては、〈ランプ〉の漢字訳語「洋燈」が当時の知識人の間に定着していただろうことがわかる。

臺灣大學學術期刊資料庫

（二）表記についての分析

前にも述べたように、今回の考察に用いたテキストは『漱石新聞小説復刻全集』(ゆまに書房)及び『定本 漱石全集』(岩波書店)の二種類であるが、以下それぞれを『新聞復刻』と『岩波定本』と略す。

調査した漱石の作品に〈ランプ〉[7]という単語が出たのは、『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『草枕』『野分』『虞美人草』『坑夫』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『心　先生の遺書』『道草』と 13 冊あるが、前の『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『草枕』『野分』の 4 冊は新聞には掲載されなかったため、この 4 冊における〈ランプ〉の表記は『岩波定本』でしか調べられない。

漱石作品における外来語〈ランプ〉の表記調査結果を、次の表三と表四に示す。表三は、『新聞復刻』の 9 冊をもって〈ランプ〉の表記を調査した結果であるが、全部で 97 例をピックアップできた。一方、表四は『岩波定本』の 13 冊で調べた〈ランプ〉の表記結果であり、全部で 114 例が拾われた。

表三『新聞復刻』における〈ランプ〉の表記調査結果

	洋燈（らんぷ）	ランプ 洋燈	ランプ
合計	26	56	15

表四『岩波定本』における〈ランプ〉の表記調査結果

	洋燈（らんぷ）	洋燈（ランプ）	ランプ
合計	51	35	28

表三と表四から、漱石作品に用いられた〈ランプ〉の表記は、「洋燈（らんぷ）」「洋燈（ランプ）」「ランプ」と三種類が見付かったわけであるが、漢字だけの表記「洋燈」はないことも明らかになった。『新聞復刻』と『岩波定本』で表記の一番多いのは、それぞれカタカナルビ付きの漢字

[7] 本稿では、単語そのものをさす場合は〈ランプ〉、カタカナ表記を表す場合は「ランプ」と使い分けることにした。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

表記「洋燈(ランプ)」とひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈(らんぷ)」であり、両者が異なっているのである。この違いに関しては後に論じるが、ルビがひらがなかカタカナかはともかく、漢字表記に仮名ルビ付きというのは、「洋燈」という漢字による意味的な表記と仮名による音的な表記が同時に用いられていることが重要である。この「洋燈(らんぷ)」と「洋燈(ランプ)」の表記例を合わせると、『新聞復刻』は 85%あり、『岩波定本』も 75%に上り、いずれにしても 3/4 以上を占めていることになる。要は、漱石が作品の中で〈ランプ〉という語に対して意味と音の両方をともに意識する表記態度を有していたと考えられることである。ちなみに、カタカナだけの表記「ランプ」は両テキストともに例がいちばん少ないのである。

以下に、漱石作品に出ている〈ランプ〉の三種類の表記「洋燈(らんぷ)」「洋燈(ランプ)」「ランプ」について論じていく。

1、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈(らんぷ)」

前述した如く、〈ランプ〉は江戸末期ごろ既に日本に伝えられて、明治期後半になると、普通の人々によく知られ、多く用いられた、即ち、一般の日本人の生活に入り込んだ照明灯具である。佐藤(1990)には、早くも江戸時代に日本語に入って来た外来語をめぐった、漱石の表記意識に関する、次のような記述が見られる。

> 「…「ちょっ着」という平仮名表記をとっているのは、漱石自身、明治に登場した外来語というよりは、既に江戸時代に登場した伝統のある外来語という意識があったためとみられる。」(360 頁)

例えば、「金平糖(こんぺいとう)」「襦袢(じゅばん)」「烟(煙)草(たばこ)」「天麩羅(てんぷら)」「毛布(けっと)」などである。このひらがな「らんぷ」は漢字表記付きのルビではあるものの、佐藤の考えの傍証例にもなるかと思われる。つまり、漱石には〈ランプ〉というのは江戸時代に登場した伝統のある外来語だという考えがあったのではないかと思われる。一方、前に説明したように、明治期の諸辞書における〈ランプ〉という外来語の登録状況からして、〈ランプ〉の漢字訳語「洋燈」が一般の知識人の間に定着

臺灣大學學術期刊資料庫

したことばだったろうと述べたが、その訳で、漱石にも用いられたのであろう。

このひらがなルビ付きの漢字「洋燈（らんぷ）」という表記の仕方から考えると、漱石作品の創作年代においては、漱石を初め、当時の知識人の間で〈ランプ〉というものが当時の日本社会でかなり受容されていた照明器具であり、よって〈ランプ〉は伝統のある外来語なのだから、ひらがなルビが用いられたのであろう。一方、やはり西洋伝来の文物という意識が強く残っていたため、「洋」という漢字を含む漢字訳語「洋燈」も共に表記に使われたと考えられる。

2、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」

前に、〈ランプ〉が早くも西洋から日本に伝わってきて、日本人にかなりなじまれていたため、漱石もひらがな表記を用いたのだ、という漱石の表記意識を述べたが、だとすると、一方のカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」がなぜ見られるのかについても考えてみる必要があろう。それは恐らく、英語力も高く、しかもイギリス留学の経験をも持つ漱石には、西洋の新文物に抱く西洋伝来の意味もしくは価値というものが一般の人より特に強くあったため、カタカナルビを選択させたのではなかろうか、と思うのである。

なお、漱石作品の中で『それから』という作品だけに、〈ランプ〉の表記がカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」ばかりになっている。これは、恐らく主人公の出身背景と関係があると思われる。主人公の代助は、裕福な家の次男坊で、大学卒業後も無職のまま実業家の父親に頼って、一戸建ての家を構え、書生と下女を置いて、裕福で優雅な日々を送っていた。小説に〈ランプ〉が出ている箇所は、殆ど代助のうちであり、下女や書生の門野がその〈ランプ〉を持って部屋を移動したりするシーンであるが、漢字表記「洋燈」にカタカナルビ付きというのは、その裕福な光景やイメージでも表そうとしていたのではないかと考えられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

3、カタカナのみの表記「ランプ」

漱石の作品の中には、漢字無しのカタカナ表記の「ランプ」も見られるが、特に最初の小説『吾輩は猫である』及び中期頃[8]の作品『坑夫』には、他の表記形態はなく、いずれもカタカナ表記のみの「ランプ」ばかりである[9]。が、この両作品に用いられたカタカナ表記「ランプ」は、作品ごとにその使用の理由が異なると考えられる。

前出の佐藤(1990)では、外来語と訳語との関係についても、次の如く論及されている。

> 「一般的に考えられることは、外来語は、外国語を翻訳するに当たり、対応する訳語が想定しにくい場合に急遽登場するものと言うことができよう。訳語が定着すれば、外来語を使用することが少なくなるのである。『吾輩は猫である』に登場する外来語は訳語が成立しないために使用されたもので、その後の訳語の発達に従って、訳語にとって代わられる可能性を含んでいる。」(344 頁)

ところが、前述した明治期の辞書類における〈ランプ〉という語の注釈では、19 世紀終わりごろ既に「洋燈」という訳語が見られる。即ち、漱石が『吾輩は猫である』を書いていた (1905-1906) 頃は、「洋燈」という意訳語が当時の知識人たちによく知られており、既に定着していた訳語だったろうと考えられる。しかし、上述した佐藤(1990)の記述とは異なり、「洋燈」という訳語は外来語に取って代わらなかった。しかも、取って代わられるどころか、漢語訳語「洋燈」すら『吾輩は猫である』には用いられなかった。

恐らく、これは漱石の「個人的言語、内的言語」と関わるのではないかと考えられる。小池(1994)には、漱石が横文字を多用し、片仮名書きの横文字も少なくないことから、

---

8 ここで言う漱石の中期頃の作品というのは、漱石の中・長編小説の最初の『吾輩は猫である』(1905)から最後の『明暗』(1916)までの期間の中期頃をさして言うものである。作品の内容から呼ばれる、いわゆる「前期三部作」・「後期三部作」の「前期」「後期」と異なる。本稿での漱石の小説についての時期的な分類は後の第四節で説明する。

9 『新聞小説』と『定本漱石』の『坑夫』は同じくカタカナのみの「ランプ」表記だけである。

臺灣大學學術期刊資料庫

「横文字は漱石にとって漢語や和語と同等のきわめて親しい存在であったようです。」(54 頁)

と、漱石の「自然な言語意識」について論じられている。漱石は明治 35 年の暮れイギリス留学から帰国し、その後もしばらくは横文字を使用し続けたそうである[10]。最初の小説『吾輩は猫である』をはじめ初期の作品が創作されたのもその時期に当たり、当時の漱石にとって〈ランプ〉という外来語も、カタカナ表記にすべき、親しい存在だという意識が自然にあったのではないだろうか。現に、他の複数表記をもつと見られる「ハンドル」「ベル」「ポケット」「レール」などの外来語も、同作品にはカタカナ表記しか使用されていないのである。但し、これらの語も他の作品にはカタカナだけの表記以外に漢字表記なども見られることには注意を払う必要があろう。つまり、漱石が最初の小説『吾輩は猫である』を書いた頃、外来語にカタカナ表記のみが用いられたのは、漱石に、外来語のカタカナ表記に対する親しさという自然な言語意識があったからであろう。

一方、漱石の中期頃の作品『坑夫』は少々異質である。その前後の作品では、〈ランプ〉という語の表記にひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈(らんぷ)」とカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」が用いられている[11]のに対し、『坑夫』だけはカタカナ表記のみの「ランプ」ばかりが出ているのである。これは、恐らく、『坑夫』という作品の内容の特殊性と関連があると思われる。『坑夫』のストーリーのロケーション背景は主に鉱山の坑道であり、〈ランプ〉が用いられた場面も坑道の場面である。坑道にある〈ランプ〉は、他の作品でも登場する日常的なものではなく、極めて専門的な、外来の探鉱用道具であることを表現したいという特殊な意識が働いたせいではないかと考えられるのである。

[10] 小池(1994)52 頁を参照。
[11] 第四節の表五と表六を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

四、小説の内容文脈からみる〈ランプ〉の表記

第三節で漱石の小説に用いられた〈ランプ〉の三種類の表記「洋燈（らんぷ）」「洋燈（ランプ）」「ランプ」における漱石の表記意識について論じた。本節では、小説の内容文脈を参照しながら、漱石の〈ランプ〉という外来語に対する表記の意図や原則といった問題に関して、改めて論じてみたい。

本稿は〈ランプ〉の表記を通時的な観点を念頭に置きながら分析するものであるが、今回の調査対象とする漱石の 13 冊の中・長編小説を、時期的に前期・中期・後期と大雑把に三つの時期に分けることにする。最初の、新聞に掲載されることのなかった『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『草枕』『野分』の四冊は前期の作品とし、その後の『虞美人草』『坑夫』に、いわゆる前期三部作の『三四郎』『それから』『門』を中期の作品とする。そして、いわゆる後期三部作の『彼岸過迄』『行人』『心』及びその後の『道草』を後期の作品[12]とすることを断っておく。

まずは、両テキストにおける作品別の〈ランプ〉の表記の内訳を詳しく、次の表五と表六に示す。

表五　『新聞復刻』の作品別による〈ランプ〉の表記

	洋燈（らんぷ）	ランプ 洋燈	ランプ
吾輩は猫である 坊つちゃん 草枕 野分			
虞美人草	10	4	
坑夫			13
三四郎	3	8	
それから		15	
門	13	8	1
彼岸過迄			1
行人		1	
心		8	
道草		12	
合計	26	56	15

[12] 漱石の遺作小説『明暗』には〈ランプ〉という外来語が見付からなかった。

臺灣大學學術期刊資料庫

表六　『岩波定本』の作品別による〈ランプ〉の表記

	洋燈（らんぷ）	洋燈（ランプ）	ランプ
吾輩は猫である			8
坊つちやん	2		4
草枕	1		
野分		1	1
虞美人草	12	2	
坑夫			13
三四郎	4	7	
それから		15	
門	19	2	1
彼岸過迄			1
行人		1	
心	5	3	
道草	8	4	
合計	51	35	28

表五の『新聞復刻』の場合は、中期と後期において、いずれもカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」が優勢であり、特に後期に入ると、その表記しか見られない。言わば、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」への一本化といった表記原則の傾向が見られるわけである。但し、この表記原則が、漱石自身の原則なのか、新聞社の編集上の原則なのかはすぐにはわからない。

一方、中期には、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」と、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈（らんぷ）」の両方とも見られる。ただ、『新聞復刻』ではカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」、『岩波定本』ではひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈（らんぷ）」が多い、という違いが認められる。それはしばらくさておき、この二種類の表記について、作品の内容文脈の観点から検証してみることにしよう。

（一）「洋燈（らんぷ）」について

三の(二)の1で、〈ランプ〉というものが早くも江戸時代末頃に日本に伝わってきて、〈ランプ〉が日本人になじまれたやや古い外来語であったため、ひらがな表記(ルビ)が成されたことを見た。同時に、西洋伝来の照明灯具という意識を漱石がもっていたため、舶来品という「洋」の字を冠した、漢字表記の「洋燈」も共に用いられたので

臺灣大學圖書館期刊資料庫

あろうと論じた。ここでは、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」を、それが用いられた作品の文脈から見てみることにしよう。

まず、次の二例を見られたい。

(1) 「誰だい」

「何だい、夫は」

「此方が紙屑籠で、此方が洋燈の台」

「そんなハイカラな形姿をして、大きな紙屑籠なんぞを提げてるから妙なんだよ」

(『虞美人草』十四（『岩波定本』第四巻 266 頁）)

(2) 「洋燈の台を買つて来て下さつたでせうか」と一人が云ふ。

「さうさね」と一人が応へる。

(『虞美人草』十四（『岩波定本』第四巻 304 頁）)

上の(1)と(2)はいずれも〈ランプ〉の一部分（付属品）「洋燈の台」が言及された文脈である。そして、次の例も、

(3)　小野さんは何を思つたか、左手を畳へつかへると、右を伸ばして洋燈の心をぱつとだした。六畳の小地球が急に東の方へ廻転した様に、一度は明るくなる。

(『虞美人草』十四（『岩波定本』第四巻 300 頁）)

(4) …。御米は火の気のない真中に、少時佇ずんでいたが、やがて右手に当る下女部屋の戸を、音のしない様にそつと引いて、中へ洋燈の灯を翳した。

(『門』七（『岩波定本』第六巻 436 頁）)

〈ランプ〉の「心」や「灯」がふれられている。いずれも〈ランプ〉の一部分が言及された記述である。

このように、漱石の中期の小説『虞美人草』や『門』では、〈ランプ〉の一部分、例えば〈ランプ〉の「台」や「灯」や「心」が言及された場合は、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が用いられていることが特徴的である。

なお、〈ランプ〉に関する説明が、連体修飾の形で表現される文脈でも同じような表記形態が見られる。例えば、

臺灣大學學術期刊資料庫

(5) …。駅夫が屋根をどしへ踏んで、上から灯の点いた洋燈を挿し込んで行く。

(『三四郎』七（『岩波定本』第五巻 275 頁）)

のように、「灯の点いた」という〈ランプ〉に関する詳しい説明が連体修飾節の形で取り上げられる場合もひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が使用された。

他に、『門』などでは、〈ランプ〉そのものに関する描写の文脈でも同じような表記形態が見られた。

(6) …。夫婦は夜中燈火を点けて置く習慣が付いていゐるので、寐る時はいつでも心を細目にして洋燈を此所へ上げた。

(『門』七（『岩波定本』第六巻 435 頁）)

(7) 「物理学者でも、ガリレオが寺院の釣り洋燈の一振動の時間が、振動の大小に拘はらず同じであることに気が付いたり、ニュートンが林檎が引力で落ちるのを発見しりするのは、始めから自然派ですね」

(『三四郎』九（『岩波定本』第五巻 514 頁）)

(6)の「洋燈」の前の「心を細目にして」は〈ランプ〉に関する描写であり、(7)の「釣り洋燈」は〈ランプ〉の種類でその後の記述も「釣り洋燈」についての詳しい説明である。このように、〈ランプ〉そのものに関する説明・描写が見られる個所にもひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が用いられたようである。

〈ランプ〉の一部分または〈ランプ〉そのものに関する描写以外に、「洋燈」というひらがなルビ付きの漢字表記法が用いられる現象はもう一つ見られる。それは、暗くてまた静かなイメージが描かれている文脈である。例えば、

(8) 三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顔をしてゐる。口を利いてゐるものは誰もない。

(『三四郎』一（『岩波定本』第五巻 277 頁）)

(8)では「洋燈」の前に「暗い」という修飾語もあるし、その後の文脈も暗くて静かな情景が描かれている。こんな暗く静けさを感じる

臺灣大學學術期刊資料庫

イメージの情景にひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が用いられる現象が特に目立っており、他に、

(9) 御米は又立ち上つて、洋燈を手にした儘、間の襖を開けて茶の間へ出た。暗い部屋が茫漠手元の灯に照らされた時、御米は鈍く光る筐筒の環を認めた。夫を通り過ぎると黒く燻ぶつた台所に、腰障子の紙丈が白く見えた

(『門』七（『岩波定本』第六巻 436 頁）)

(10) 「私は実に貴方に御気の毒で」と切なさうに言訳を半分して、又それなり黙つて仕舞つた。洋燈は何時もの様に床の間の上に据ゑてあつた。御米は灯に背いてゐたから、宗助には顔の表情が判然分らなかつたけれども、其声は多少涙でうるんでゐる様に思はれた。……。さうして薄暗い影になつた御米の顔を凝と眺めた。御米も暗い中から凝と宗助を見てゐた。

(『門』七（『岩波定本』第六巻 501 頁）)

などの例も見られた。

以上の如く、中期の小説『三四郎』と『門』で暗くて静かなイメージの情景に関する描写の場合も、ひらがなルビ付きの漢字表記法「洋燈」が使用されるという傾向が窺われた。

更に、〈ランプ〉そのものの描写とともに、暗くて静けさを感じるイメージが表現されている文脈に、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が使われた例も見られた。

(11) …。此時床の間に置いた洋燈の油が減つて、短かい心に届かなくなつたので、御米の寐てゐる所は真暗になつてゐた。其所へ清の手にした灯火の影が、襖の間から射し込んだ。

(『門』七（『岩波定本』第六巻 439 頁）)

(12) …。宗助は床の間に乗せた細い洋燈の灯が、夜の中に沈んで行きさうな静かな晩に、始めて御米の口から其話を聞いたとき、流石に好い気味はしなかつた。

(『門』七（『岩波定本』第六巻 511 頁）)

臺灣大學學術期刊資料庫

(11)における「洋燈の油が減って、短かい心に届かなくなった」というのは〈ランプ〉そのものに対する描写であり、その後に御米の寝ているところが暗いということも明言されている。(12)も、「床の間に乗せた細い洋燈の灯」が〈ランプ〉そのものの描写で「細い洋燈の灯」に暗いイメージが仄めかされ、すぐその後にも静な情景が描かれている。

以上論じた如く、「洋燈」というひらがなルビ付きの漢字表記法は、中期の小説では〈ランプ〉の一部分やそのものに対する描写、または暗くて静けさを感じる情景に用いられているという傾向が窺われた。

ところで、後期の小説に入ると、果たして同じような表記現象が見られるのであろうか。前にも論じたが、『新聞復刻』では、後期の小説における〈ランプ〉の表記がカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈」への一本化という傾向にあったため、『新聞復刻』をもって検証することは無理がある。そこで、『岩波定本』をもって「洋燈」というひらがなルビ付きの漢字表記法について検討してみることにする。

まず、中期の小説と同じく〈ランプ〉の一部分またはそのものに関する描写の文脈にひらがなルビ付きの漢字「洋燈」という表記法が用いられている例が『道草』にあった。

(13)　成程火屋が薄黒く燻ぶつてゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無暗に灯を高くすると、斯んな変調を来すのが此洋燈の特徴であった。

(『道草』七（『岩波定本』第十巻 144 頁）)

(14)　彼は退屈のうちに細いながら可なり鋭どい緊張を感じた。その所為か、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子の蓋を通して油煙に燻ぶつた洋燈の灯を眺めてゐた時とは全く変つていた。

(『道草』七（『岩波定本』第十巻 147 頁）)

(13)の記述が〈ランプ〉そのものの特徴についての描写であり、

臺灣大學學術期刊資料庫

(14)は連体修飾の形で〈ランプ〉、そして〈ランプ〉の一部分も言及されている。

また、暗いイメージの情景に関する描写も、『心』と『道草』に中期の小説と同じく、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が用いられている例が見当たった。

(15)　私は暗示を受けた人のやうに、床の上に肘を突いて起き上りながら屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つてゐるのです。……。私はすぐ起き上つて、敷居際迄行きました。其所から彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

(『心　先生の遺書』七（『岩波定本』第九巻 277 頁）)

(16)　時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗闇を縁側伝ひに廊下へ出ると、突当りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。健三は其一枚を開けて内に入つた。

(『道草』七（『岩波定本』第十巻 154 頁）)

更に、中期の小説と同じく、〈ランプ〉そのものに関する描写とともに暗いイメージの情景が描かれている文脈に「洋燈」という表記法が使用された例が、後期の小説『道草』にも見付かった。例えば、

(17)　電気燈のまだ戸毎に点されない頃だつたので、客間には例もの通り暗い洋燈が点いていた。

其洋燈は細長い竹の台の上に油壺を嵌め込むやうに拵えたもので、鼓の胴の恰形に似た平たい底が畳へ据わるやうに出来てゐた。

(『道草』七（『岩波定本』第十巻 144 頁）)

(17)ではまず〈ランプ〉の周りの環境が暗いというイメージであり、その次の段落は〈ランプ〉そのものについての説明である。

以上からして、基本的には、中期の小説における、文脈意図によるひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」の表記法が、後期の『心』と『道草』にも受け継がれている、という傾向性も窺われた。

臺灣大學圖書館日語資料庫

ところが、後期の小説『心』と『道草』では〈ランプ〉の表記法が上述した中期の小説と異なる例も見られた。例えば、

(18)　……。然し私の室はもう真暗でした。奥さんはおやへと云つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜にぼんやりと私の室に差し込みました。

(『心　先生の遺書』（『岩波定本』第九巻 251 頁）)

(19)　Kは洋燈の灯を脊中に受けてゐるので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。

(『心　先生の遺書』（『岩波定本』第九巻 264 頁）)

上の二例は、〈ランプ〉そのもの(の一部分)が言及された文脈であるが、ひらがなではなく、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈」が使われる。また、

(20)　……。私はもう何時かと又尋ねました。Kは一時二十分だと答へました。やがて洋燈をふつと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。

(『心　先生の遺書』（『岩波定本』第九巻 251 頁）)

(21)　其時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のやうに静かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落してゐる辺は、夜具の縞柄さへ判明しないぼんやりした陰で一面に裏まれてゐた。

(『道草』（『岩波定本』第十巻 245 頁）)

も、静かで暗いイメージの情景が描かれている文脈であるが、その文における〈ランプ〉の表記が、ひらがなではなく、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈」なのである。

要するに、後期の小説になると、中期の小説における、文脈意図による「洋燈」というひらがなルビ付きの漢字表記原則の揺れが見られたわけである。

以上検討してきた如く、漱石の中期の小説では〈ランプ〉そのものや一部分に言及された文脈または暗くて静けさを感じる情景が描かれている文脈の場合は、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が

臺灣大學學術期刊資料庫

用いられた傾向性が窺われた。後期の小説(『岩波定本』の場合)も基本的には中期の表記法が受け継がれているが、多少揺れがあると明らかにできた。

(二)「洋燈(ランプ)」について

三の(二)の 2 で、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」は、漱石の音と意味を共に重視した表記法であり、英語力の高い漱石が舶来品に西洋伝来という意識を強く抱いていたことによる表記意識に基づいたのであろうと論じた。また、作品内容の背景によるものと思われる、「洋燈(ランプ)」という表記法ばかりの『それから』の特殊な状況を除いては、中期と後期の小説に、「洋燈(らんぷ)」と「洋燈(ランプ)」という二種類の表記の使い分けがあることをも指摘した。ここでは、中期と後期の小説に用いられた、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」について、小説の内容文脈をもって検討してみよう。

前にも述べたように、『新聞復刻』では、後期の小説になると〈ランプ〉表記のカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」への一本化が見られたので、ここでは、「洋燈(らんぷ)」と「洋燈(ランプ)」の使い分けがある『岩波定本』の表記について分析を行う。

カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」は、〈ランプ〉そのものとはさほど関係なく、人の行為に関する描写が中心となる文脈に用いられるようである。例えば、

(22)　「アハヽヽヽ」と老人は大きな腹を[せ]競り出して笑つた。洋燈(ランプ)の蓋(かぶ)が喫驚(びつくり)する位な声である。

(『虞美人草』八（『岩波定本』第四巻 146 頁）)

文中に〈ランプ〉の一部(「蓋」)が言及されてはいるものの、文全体は主に老人の笑った行為についての描写であり、「ランプの蓋」が笑い声の比喩に用いられただけである。他に『三四郎』『門』にも数例見られ、例えば、

(23)　三四郎は心の裡(うち)で、火の消えた洋燈(ランプ)を見る心持ちがした。元(もと)の所に立ちすくんでゐる。美禰子も動かない。

(『三四郎』六（『岩波定本』第五巻 448 頁）)

臺灣大學圖書館期刊資料庫

(24)　夕刻に行つて見ると、先生は明るい洋燈の下に大きな本を拡げてゐた。

(『三四郎』十二（『岩波定本』第五巻 582 頁）)

(25)　「其代り小六さん、憚り様。座敷の戸を閉てて、洋燈を点けて頂戴。今私も清も手が放せない所だから」と依頼んだ。

(『門』二（『岩波定本』第六巻 363 頁）)

などである。

そして、後期の小説にも、上述した、主として人の行為に関する描写の場合においてカタカナルビ付きの漢字「洋燈」が用いられるという表現意図が受け継がれている例が見られた。

(26)　彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其所を輝すのは、男子の見るべからざるものを強ひて見るやうな心持がして気が引けた。

(『道草』（『岩波定本』第十巻 245 頁）)

(27)　細君は裁縫が一番好きであつた。夜眼が冴えて寐られない時などは、一時でも二時でも構はずに、細い針の目を洋燈の下に運ばせてゐた。

(『道草』（『岩波定本』第十巻 258 頁）)

なお、ひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」が暗くて静けさを感じるという表現意図を表すこととは反対に、明るいイメージの情景が描かれている文脈において、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈」が用いられる例が見当たった。

(28) 静かなる夜を陽に返す洋燈の笠に白き光りをゆかしく罩めて、唐草を一面に高く蔽き出した白銅の油壺が晴がましくも宵に曇らぬ色を誇る。燈火の照らす限りは顔毎に賑やかである。

(『虞美人草』七（『岩波定本』第四巻 140 頁）)

(28)では、「陽に返す」や「白き光り」「晴がましくも宵に曇らぬ色」のように明るいイメージが表されており、そして「燈火の照ら

臺灣大學圖書館期刊資料庫

す限りは顔毎に賑やかである」からも明るい雰囲気の情景が感じられるのである。

要するに、漱石の中期と後期の小説では〈ランプ〉そのものの描写と関係なく、人の行為が中心として記述されている場合または明るいイメージの情景が描かれている文脈では、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」が用いられた傾向性がとらえられよう。

五、両テキストにおける〈ランプ〉の表記の相違に関して

本節では『新聞復刻』と『岩波定本』の両テキストにおける〈ランプ〉の表記の相違例を取り上げて検討する。

漱石の前期の小説は『岩波定本』のテキストのみであり、後期の場合、『新聞復刻』ではカタカナルビ付きの漢字「洋燈(ランプ)」への表記一本化ということがあったので、両テキストにおける〈ランプ〉の表記の相違を検討できるのは中期の小説だけになる。前掲の表四と表五を比較してみると、漱石の中期小説における両テキストの相違は九つの例があった。そのいずれも『岩波定本』ではひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈(らんぷ)」であるが、『新聞復刻』ではカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈(ランプ)」になっているものである。果たして、両表記のうち、どちらがより適切なのであろう。次は前節で論じた漱石の表現意図から検証してみる。[13]

まず、次の(29)と(30)は皆〈ランプ〉そのものについての描写ではなく、人の行為に関する記述である。例えば、

(29)　「何だ。冗談か」と行かうとすると、卸(おろ)し立ての草履が片方(かた)足を離れて、拭き込んだ廊下を洋燈(らんぷ)部屋の方へ滑(すべ)つて行く。

(『虞美人草』十二（『岩波定本』第四巻 215 頁）)

(30)「清三」と先生は洋燈(らんぷ)の影(かげ)から呼び留めた。

「えゝ」と小野さんは月のさす方から振り向いた。

[13] 以下の用例はとりあえず『定本漱石』のだけを掲げる。

臺灣大學學術期刊資料庫

(『虞美人草』十四（『岩波定本』第四巻 303 頁）)

が見られる。同じような例が他にも二つある。

また、次の(31)は、明るい情景が描かれている文脈であり、これもカタカナルビ付きの漢字「洋燈」の表記法のほうが漱石の表現意図を反映するのであろう。

(31)　…。手焙の火も出掛よりは濃い色に燃えてゐた。洋燈も明るかつた。

(『門』三（『岩波定本』第六巻 364 頁）)

要するに、第四節の漱石の表現意図の論点に基づいて考えると、上述した例(29)～(31)は、『岩波定本』のひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」よりも、『新聞復刻』のカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈」の方がより適切であろう。

一方、上と反対に、『岩波定本』のひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈」の方が良かろうと思われる例もある。

まず、暗くて静けさを感じる情景に関する描写の例が挙げられるが、例えば、

(32)　御米が床へ這入ってから、約二十分許の間、宗助は耳の傍に鉄瓶の音を聞きながら、静な夜を丸心の洋燈に照らしてゐた。

(『門』十一『岩波定本』第六巻 481 頁）)

(32)は〈ランプ〉の「心」の種類が特に「丸心」だと明示され、この「丸心」は照明度が弱いそうだが[14]、そのことから考えると、暗くて「静かな夜」を照らしていることになる。

それから、

(33)　…。夫婦は毎朝露の光る頃起きて、美しい日を廂の上に見た。夜は煤竹の台を着けた洋燈の両側に、長い影を描いて坐つてゐた。

(『門』四（『岩波定本』第六巻 407 頁）)

[14] 『門』(『定本漱石』第六巻、663 頁）注四八一 14 を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

は、〈ランプ〉に関する詳しい説明が連体修飾の形で取り上げられているが、これも第四節の論点に基づくと、『岩波定本』に用いられたひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈（らんぷ）」の方が良いのであろう。

上で論じた如く、漱石の表現意図から考えると、『新聞復刻』と『岩波定本』における表記の相違に関しては、『岩波定本』のひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈（らんぷ）」が適切な例もある一方、『新聞復刻』のカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」が適切な例もあり、一概には言えない。

六、おわりに

以上、本稿では、まず明治後期～昭和初期の諸辞書で〈ランプ〉という外来語の登録状況を調べ、〈ランプ〉の受容や意訳語との関係を確認した後、『漱石新聞小説復刻全集』及び『定本　漱石全集』の二種類のテキストにおける外来語〈ランプ〉の表記調査を通して、漱石の外来語に対する受容態度や表記意識、またそれと表現意図との関わりなどについて分析を行ってきた。

その結果、明治初期の『和英語林集成』では「洋燈」という訳語が見当たらなかったが、十九世紀の終わり頃初めて登場した。明治後期～昭和初期ごろの辞書に「洋燈」という意訳語が載っていることから、〈ランプ〉の漢字訳語「洋燈」が一般の知識人の間に定着していただろうことを述べた。

次に、両テキストにおける〈ランプ〉の表記特徴に関して、漱石の作品には漢字だけの表記「洋燈」はなく、カタカナだけの表記「ランプ」が一番少ないことが明らかになった。なお、『新聞復刻』と『岩波定本』において表記の一番多いのは、それぞれひらがなルビ付きの漢字表記「洋燈（らんぷ）」とカタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」であり、両資料が異なっている。また、『新聞復刻』は、後期の小説になると、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」の一本化への収束現象というような表記の傾向が窺われた。

漱石の外来語に対する受容態度や表記意識に関しては、漱石が外

臺灣大學學術期刊資料庫

来語〈ランプ〉に対して意味と音の両方をともに意識するという表記意識を持っていたことを主張した。ひらがなルビ付きの漢字「洋燈（らんぷ）」という表記については、〈ランプ〉が当時の日本社会でかなり受容されている照明器具であるため、〈ランプ〉を伝統のある外来語と認めていたらしく、ひらがなルビを用いている。その一方、西洋伝来の文物という意識が漱石にあったために、「洋」という漢字を冠した、一般の知識人の間に定着した漢字訳語「洋燈」も共に表記に使われたのだと主張した。なお、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」ばかりの『それから』と、カタカナ表記のみの「ランプ」だけの『坑夫』の両作品の傾向は、作品内容の特殊性と関係があるだろうことを論じた。また、最初の小説『吾輩は猫である』に、カタカナ表記のみの「ランプ」だけが見られる理由は、前期の小説を創作した頃、外来語のカタカナ表記に対する親しみという自然な言語意識が漱石に働いたためであろうと考えた。

さらに詳しく、小説の内容文脈から見ると、〈ランプ〉という外来語の表記と漱石の表現意図との関わりについて、ひらがなルビ付きの漢字表記法「洋燈（らんぷ）」は、〈ランプ〉の一部分や〈ランプ〉そのものに対する記述、または暗くて静けさを感じる情景に多く用いられる傾向があることを確認した。それに対し、カタカナルビ付きの漢字表記「洋燈（ランプ）」は、〈ランプ〉そのものとはさほど関係なく、主に人の行為に関する描写または明るいイメージの情景が描かれている文脈に用いられる傾向があることをも確めた。最後に『新聞復刻』と『岩波定本』の両テキストにおける〈ランプ〉の表記の相違例も取り上げ、本稿で論じた漱石の表現意図から検証してみたが、どちらのテキストの表記が適切なのかは例によって異なり、一概には言えないことも見た。

本稿での検討の結果、〈ランプ〉という外来語に対する漱石の表記意識や表現意図には傾向性が認められ、一方ではやや複雑な様相を呈しているかのようにも見られたが、これが他の外来語の表記にも類似する現象が見られるかどうかを、併せて検討する必要があるよ

臺灣人學術期刊資料庫

うに思われる。今後の課題とする。

【参考文献】（出版年代順）

佐藤武義(1990)「『吾輩は猫である』の外来語」『国語論究』第二集、東京:明治書院、頁 49-97

小池清治(1994)「第二講　漱石の日本語」『岩波セミナーブックス 48 漱石をよむ』、東京:岩波書店、頁 334-368

山下浩(1994) 「拝啓岩波書店殿―新『夏目漱石』の問題点について―」『國文學』71、大阪:関西大学国文学会、頁 15-38

林慧君(2018)「第七章 漱石作品の外来語」『日本学研究叢書 26　漱石と〈時代〉―没後百年に読み拓く―』、台北:國立台灣大學出版中心、頁 155-179

【辞書と事典】（出版年代順）

『和英語林集成』(1872)美國 平文先生編譯、日本横濱梓行

『ウエブスター氏新刊大辭書　和譯字彙』(1888)イーストレーキ・棚橋一郎共譯、東京:三省堂藏版

『日本辭書 言海』 (1889-1891) 大槻文彦、東京:印刷局

『再訂增補　和譯英字彙第六版』(1891)嶌田豐增補纂譯、東京:大藏書店藏版

『雙解英和大辭典』(1892)奚疑島田豊纂譯、東京:益商社藏版

『日本大辭典 ことばの泉』(1904)落合直史、東京：大倉書店

『辭林』(1907)『辭林』金澤庄三郎編纂、東京:三省堂書店

『雙解英和大辭典 增訂第二十五版』(1907) 奚疑島田豊纂譯、東京:共益商社藏版

『日用舶来語便覧』(1912)棚橋一郎・鈴木誠一著、東京:光玉館

『外来語辭典』(1914)勝屋英造編、東京:二松堂書店

『日本外来語辞典』(1915)上田萬年など編、東京:三省堂

『大日本国語辞典』(1915-1919) 上田萬年・松井簡治編、東京:冨山

臺灣大學圖書館期刊資料庫

房
『夏目漱石事典』(1992)三好行雄編、別冊國文學改装版、東京：學燈社
『日本大百科全書』（ニッポニカ）、小学館、電子資料
(JapanKnowledge Lib)

【テキスト】

『漱石新聞小説復刻全集』第一巻～第九巻(1999)東京：ゆまに書房
『定本　漱石全集』第一巻～第十巻(2016～2019)東京：岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫